令和６年度　第１回丹波市総合教育会議　会議録（要約）

日時：令和６年８月 29 日（木）午前 10 時 55 分～午前 12 時 00 分
場所：丹波市役所山南支所３階　大会議室

出席者

市長	林　時彦
副市長	細見　正敏
教育長	片山　則昭
教育長職務代理者	吉竹　主税
教育委員	上羽　裕樹
教育委員	中川　卯衣
教育委員	渕上　智帆
総務部長	岡林　勝則
教育部長	足立　勲
教育部次長兼学校教育課長	山本　浩史
教育部学校教育課情報教育担当参事	小森　真一
教育部学校教育課副課長兼指導係長	尾松　正章
教育部学校教育課指導主事	中林　孝雄
教育部学校教育課指導主事	西野　隆博
教育部教育総務課長	足立　安司
教育部教育総務課副課長兼企画総務係長	足立　真澄
総務部次長兼総務課長	荒木　一
総務部総務課副課長兼総務係長	船越　正一
総務部総務課主事	山口　智也

傍聴者　１名

１　開会
岡林部長

２　市長挨拶
林市長　挨拶

３　協議事項

「不登校対策について」

（１）概要説明

教育部 山本次長より説明

（２）意見交換

〇渕上委員

・昔に比べて過保護になってきている時代で、学校に行かなくてもいいというような認識になってきている中で、不登校になっている子自身が学校に行かなくてもいいというような認識があるのか。

〇山本教育部次長

・学校を休むことに対するハードルは下がっていると思う。
・不登校になった子の話を聞いてみると、できることなら学校に行きたいと思っている子がほとんどである。
・昭和の時代は、学校は楽しくなくても行くものだという考え方であったが、行けるものなら行きたいという心理に変わってきていることは事実である。
・教育委員会としては、学校に行けるものなら行きたいということであれば、行かしてやりたいと思う、そのための努力は惜しまずにやっていきたいと考えている。

〇片山教育長

・やまびこの郷にいたときは、９割以上の子どもが学校に行きたいが行けないという状況であった。

〇上羽委員

・自身の子どもの友達も不登校になった子がいたが、要因がよくわからないような形であった。
・今の不登校の子どもの要因のようなもので傾向があるのか。

〇山本教育部次長

・不登校の要因については、特定できないものがほとんどである。
・学校側の捉え方としては、本人の要因が非常に多い。
・不安になる要素はいろいろなものがあり、同じ要因でも不登校になる子

もいれば、ならない子もいるため、学校としては本人の要因によるものと捉えている。
・令和２年度に全国的に行われた調査によると、学力のことや先生と合わないといった学校の要因が多くなっていた。
・不登校のきっかけとなるようなことを取り除くだけでは、不登校の状態が改善するものではないため、要因の特定ばかりを考えてしまうと大事なことに目が向けられなくなる。
・子どもの今の心の状態を支えることが一番大切であると考えている。

〇中川委員
・診察をしていると学校にいけない子どもたちもよく来るが、朝起きることができないということや学校に行こうと思うとお腹が痛くなるなどと言うことが多い。
・学校に行きたくないということが大きなきっかけになっているため、病名を付けても救われることも治す薬もない。
・診察をしていて、問題はきっかけではなく、どのように対策していくかということであると思うことが多い。
・自分の体と向き合うことを医療的にするようにして、子どもにも自分の体と向き合うようにしている。
・体の不調が治れば、学校に行けると思っているが、その体を治すためには心が治らないといけないということを感じる。

〇山本教育部次長
・実際に身体症状に出る子どももたくさんいる。
・身体症状に対する周囲の理解も必要であり、その心理を分かってあげるということが周囲の大人の役割ではないかと思う。

〇中川委員
・大人や親、学校が理解することも大事であり、子ども自身が自分を理解することもとても大事である。
・自分の体を受け入れることはすごく大事なことであると思うので、周りは教えるということが大事であると思う。

〇片山教育長
・不登校を未然に防止することは大事であるが、不登校となってしまった場合に、「保護者支援の在り方」とあるように家庭訪問をして保護者に出

会いに行くというようなことがないとだめだと思う。
・子どもが安心できる状況を作ることが必要であるが、その前には、信頼関係を構築しておかなければならない。
・家庭訪問をしっかりして保護者を支えていくということを充実させていく必要があると考えているため、何とかお願いできれば、１人でも救えると思う。

〇林市長
・自分自身が子どものころは、いじめや不登校もなく、学校は好きでしょうがなかった。
・なかなか対策は難しいが、楽しい学校を作っていくことが大事である。
・子どもたち１人ひとりが学校は面白いことがあるということを見つけてもらえるような学校になり、そのために先生も魅力のある先生になる必要がある。
・学校を楽しいところとして作っていってほしいと思う。

〇片山教育長
・レインボー教室の周知についてであるが、今はたくさんの子どもが来ている。ドローンを使える先生がおり、ドローンを使って遊んでいると全く来ていなかった子どもがレインボー教室に来るようになっている。
・やり方はいろいろあるが、興味を示すようなことを取り入れて、子どもと接していくことが大事であり、いろいろな形で家庭訪問等のアウトリーチを行っていくことは非常に大切である。
・家庭訪問の強化となると、時間外に訪問する必要が生じることもあり、働き方改革と逆行する。センターの機能強化により、なんとか家庭訪問を実施できるような形にしていくことが大事ではないかと思う。

〇渕上委員
・レインボー教室の学生サポーターの導入はすごく良い試みだと思う。
・不登校になるきっかけや学校などに行くきっかけも何かわからないが、もっと学生さんが増えて、きっかけの１つでも増えると良いと思う。

〇山本教育部次長
・大学生のサポーターについては、近いところのロールモデルにもなる。
・丹波市にサポーターとして手を挙げてくれる学生がいるかということは課題であったが、実際には何人か来てくれて、非常に良い取り組みであ

ると思っている。

○吉竹教育長職務代理者

・神戸に研修に行った際に、子どもが幸福を感じる要素の話をされ、いざという時にいつでもくっつける誰かがいることが必要であると話されたことがすごく印象に残っている。
・不登校になるきっかけは不明だと言われたが、まさに不明であり、不登校が解消するきっかけもわからない。
・自分はひとりぼっちではなく、「誰かが助けてくれる」という風土や環境、地域が丹波市のあちこちでできれば良いと思う。
・登校の時などに自然に声を掛け合える、地域や自治会、ご近所さんがいることも不登校を未然に防ぐために非常に大事ではないかと感じる。
・子どもたちがわくわくして、学校に行けば何があるんだろう、先生は何をしてくれるだろうというようなことを毎日思い続けて学校に行くことができるように、教育施策として何が大切かということを基本のところで考えていくことも大事である。
・教育は、学問を教えるだけでなく、子どもの宝物探しであるということを先輩から教えてもらった。
・大人でもいろいろな仕事をして、その場所にいるときに、そこで頑張れる秘訣は、認められている・役に立っているという思いである。
・学校に行けない間に、目に見えない樹液のようなものを子どもが見つけて、元気に社会や丹波で仕事ができるということを目指して、不登校対策やその関わりができればと思う。
・教育支援センターは、必要になってくるためその仕組みを整えて、子どもが行ける場所・くっつきたい場所をできるだけたくさん用意して、その中で何か力をつけて、最終的には社会参加をして、元気に仕事や生活ができるようになれば良いと思う。
・大人になってからも仕事に行きたくないと思うこともあるため、そういう心理は分かると思うので、「分かっているよ。」という気持ちで子どもに接していくことも大事であると思う。

○山本教育部次長

・不登校の未然防止の具体的な策はなかなかないが、まずつながりを作っておくことは１つ大きなヒントであると思う。
・友達とたくさんつながっておくことや先生とつながっておくといったことはとても大事である。

・不登校になっている子どもは、最終的には社会で活躍してくれれば、不登校の期間も必要な時間であったと捉えることができると思うため、少しずつ階段を上らせてあげる支援がとても大切だと思う。
・支援としては、学校ができることもあるし、社会的にできることも考えていかなければならない。

〇細見副市長
・学校に行けない子どもたちは、おそらく家の中にいる。誰とも出会わない環境やSNSで繋がっていることもあり、居場所が学校だけではない。
・子どもたちは、どのように家で過ごしているかということは何かわかるか。

〇山本教育部次長
・昔であれば、おそらく家に１人でいることは、不安で仕方なかったと思うが、今はスマホやゲーム機を用いてSNSで同じ不登校や全国的な不登校の子どもと繋がっていることがある。
・スマホやタブレットから見ることができる動画も果てしなく自分の興味のあるものが出てくる状態であるため、気持ちを紛らわすことができている。
・時間はつぶせているが、人との関わりの中でエネルギーをためる活動をする必要があるため、エネルギーがたまっている状態ではないと考える。

〇片山教育長
・生活がだんだんずれてきて、昼夜逆転するような子どもも中にはいる。
・友達と遊びに来る子どもも中にはいたが、少なく、ほとんどが１人でいる。
・昼夜逆転することは良くないため、そうならないように親にもお願いして、寝てしまっても良いから朝になれば起こしてほしい。ということは言っていた。

〇小森参事
・不登校の中でも、特に非行の子どもの中でも、ネット依存となっている子どもの場合は、完全に昼夜逆転している例がほとんどである。
・元の生活に戻していくためには、医療的な力が必要であり、医師の力を借りながらどのようにアプローチしていくかというところを研究してい

る。
・親が責任を持って自身だけで解決しようと悩まれている方も多いと思うので、関係機関と連携しながら情報をつなぎ、１人ひとりに合った状況でケースバイケースで対応することが必要と感じた。

○中川委員
・しばらく学校に行けない時に、病気ではないかと病院に来るときはまだ傷が浅く、病院に来ることができる時間帯に親と一緒に起きて外に出られているため初期である。
・病院に来られるときは、親子ともにすごく悲壮感が漂っているが、だんだんとその状況に家族も本人も慣れてきてしまう。
・次第に昼夜逆転が完成し、朝に顔を合わさないことに家族も本人も慣れて、家庭の中で生活がずれているということは体感する。
・友達に会わないことは、子どもたちにとって寂しいことではなく、時間をつぶせる方法は持っているが、それではエネルギーがたまらないため、次のステップに進めない感じがある。そのような状態になると、かかりつけ医のレベルではなくなってきており、病院にも来なくなる経験はよくある。
・糸口が見いだせなくなる子どもがいることも確かで、だんだん最初のきっかけではないことが大きな原因になり、学校に行けなくなる子どもをよく見る。

○細見副市長
・医療や保健、福祉などの見地から何かのきっかけを作ることがセンターの強化ということだと思うため、そういった視野も必要と思う。

○片山教育長
・子どもに接するということは、愛着ではなくアタッチメントであり、そういったアタッチメントをしてもらえる先生が学校にいるということは１つの救いかなと思う。

○林市長
・この専門家のメンバーに楽しい学校を作って欲しいとお願いする。

５　閉会
岡林部長